

杉並区長・岸本聡子さんと作家・中島京子さんの対談

岸本聡子さんの『水道、再び公営化！ 欧州・水の闘いから日本が学ぶこと』を読み、杉並区長選とその後を追いかけてきた。「課題は希望のタネ 地方から国変える」と題した二人の対談（『AERA』11月21日）を抜粋して紹介したい。

中島 杉並には児童館の存続や道路の開発、高齢者の居場所、子ども食堂—いろいろな問題があって、それぞれ解決したいと活動している市民グループがある土地柄です。

岸本 はい、いろいろな方が杉並に集まっていて、「あとは候補者だけがない」と。国政だと議員が直接できることは限られていますが、地方自治は「そこに希望がある」と考えて、この10年、研究者・活動家として取り組んできたので、「絶対、区長のほうが面白そう」と、思ってしまったんです。

中島 私が素晴らしいな、と思ったのは、杉並で長く運動してきた、いろいろな人たちがウワーッと集まって、みんなで選挙を作っていくのを目の当たりにできたことです。杉並区は「原子爆禁止署名運動発祥の地」だし、お母さんたちが学校給食の自校調理方式を守ったり、さまざまな活動をしている区民が多いんです。

岸本 私がレジェンドと呼んでいる方々です。

中島 この10年、未来を明るく考えられなかったんですが、岸本さんが当選してから「未来がある」と思えてきました。

岸本 「希望」や「未来」ってキーワードですよ。今は戦争もコロナもあって、10年前には東日本大震災や原発事故があった。国際的に見ても危機の連続なので、その中で成長してきた子どもたちが心配なんです。

中島 コロナ禍でも、学校や子どもたちの問題は後回しでした。

岸本 社会に「希望がない」ことについて、自分の世代の責任を感じています。一方で希望と課題は結びついていて、女性の生きにくさや気候変動の問題も、危機でもあると同時に希望でもあると思う。実際、もう変わらないと生きていけないですから。

中島 こうした問題は杉並だけのものではないですよ。

岸本 ヨーロッパで運動している中で生まれた点のような小さな希望が集まって、ドットになり、つながって線に、時には面になるのを見てきました。日本の杉並は象徴的な一つの点ですが、他にも点はあるし、これから生まれてくるところもあるでしょう。そうなったらお互いに希望のヒントを出し合える。

地方自治の面白さだと思います。選挙はそのためのツールでしかなく、選挙と選挙のあいだに何をすることが楽しいですよ。



(2022年11月17日)